

井伏鱒二——遺された宿題

井伏鱒二の作品を読むようになったのは高校生の時だ。高校生と言っても旧制度のそれで、一九四九年から五〇年にかけてのことである。

四九年の夏、高校所在地の地方文化雑誌の編集の手伝いをしていた時、編集長から海水浴場の賑わいを書いてこいと言われ、何枚かにまとめて持つて行つたところ、「イブセマスジの文章に似ていてい」と褒めて載せてくれた。お世辞でも褒めてくれたのだから喜ぶべきだったのに、無然たるものがあった。それは当時の私が「イブセマスジ」の何者なるかを知らず、ひそかにわが師と仰いでいたヨーロッパの或る作家の文体に模して、そのルポを綴つたからだ。

しかし「似ている」と言われて気になり、「イブセマスジ」の作品を一つ二つと探して読むようになった。ようやく二〇代になつたばかりの青年にとつて井伏さんの作品は淡々としていすぎ、驚つかみにとらえて離さぬというものでもなかった。

井伏さんの作品をしみじみいと思つたのは、三〇代も半ばを過ぎるようになってからで、心に屈託がある時や邪まになる時、井伏さんの本を取り出して読み、心が穏やかで素朴になるのを味わつた。

そして井伏さんの小説を好読しているうち、井伏さんの作品群が世評と違い、「炭鉱地帯病院」とか『遙拝隊長』とか『黒い雨』とか社会的傾向が一つの無視できないうねりとして存在していることに気づき、彼とプロレタリア文学運動との関係がどうなっているのか、その具体を知りたいと思つたようにな

つていた。

そんな或る日（一九六八年五月）、森本巖夫たちのプロレタリア文学雑誌『新文化』を調べているうち、「子供たち」と呼びかけるソ連の「文盲退治」のポスターを訳した井伏さんの文章を見つけ、オヤと思ひ、何よりも本人の確認を取るのが先決と、茨窪清水町のお宅に井伏さんを訪ねたのが、お会いした最初だった。

井伏さんは『新文化』のその部分をしばらく黙読して「すっかり忘れていましたが、これは間違ひなく私の書いた文章です」と言つた。そこで、その前後のことをいろいろ遠慮なく聞いてみた。が、初対面にもかかわらず、あるいは初対面で好奇心を動かしたのか、午後二時頃何つて、まずお酒を御馳走になり、ついで夜食も頂戴し、八時頃、ようやく辞したような気がする。

その時、井伏さんは「最近、こんなものを届けてきた人がいた」と言つて、「山椒魚」の原型である「幽閉」の載っている『世紀』創刊号（一九三三年七月）を窓際の袋戸棚の上から出してきて示した。初めて見るものだった。

それから二、三度、お伺いしてさらに昔のことを聞いた。井伏さんの話は、こちらの質問に答えてあちこちに飛ぶのだが、家に帰つて思い出してみると、山あり谷あつて一篇の小説になつてた。不思議な体験だった。一人で聞くのは勿体ないので、ちょうど第二次『文学的立場』の創刊を準備していた時だったから、市ヶ谷の私学会館まで足を運んでもらつて、特にプロレタリア文学との交渉と徴用時代を中心に同人たちと話を聞いた。同誌第二号に載っている「昭和一〇年代を聞く（第三回）井伏鱒二氏」が、それだ。また『世紀』掲載の「幽閉」は古林尚君の解説をつけて創刊号を飾つた。

それからすっかり御無沙汰していたが、一九八一年一月、いわゆる反核文学者の声明の企てが起き

た時、井伏さんと呼びかけ人に口説く役を担当することになり、久しぶりに清水町のお宅に出かけた。

小沼丹氏も同席していて、日本と世界を取り巻く深刻な核状況について話し、声明の呼びかけ人になることを求めると、開口一番「声明などを出して効果があるのかね」と聞いた。そこで私が『黒い雨』の作者で、普段このような政治的声明にサインをしたことがないあなたが呼びかけ人になったら大きな効果がある」と言つて、ヨーロッパでの文学者の声明の波紋などを紹介した。すると、こんどは「原発はどうするのかね。こちらも危険ですよ」と鋭い質問がきた。井伏さんは徴用時代、マレー半島で一緒だった新聞記者松本直治の一人息子が敦賀原発の技師として被曝し、三二歳の若さで舌ガンで死んだ事実に接し、心を痛めていたのだ。

「いずれ、そういう声明も用意しなければならぬと思つていますが、現時点では意見がまとまりにくいので反核兵器に絞ることになりました」と私。

「そう。核のことを考えると、そこで思考がヒタツと止まってしまう」と言つて、しばらく目を瞑り、「じゃあサインしよう」と硯で墨を磨り、名前を書いた。

声明の呼びかけは大きな反響を呼び、翌年一月二〇日、新橋の第一ホテルで記者会見をすることになり、井伏さんの出席を求めたが、これには首をどうしても縦に振らなかつた。井伏さんらしい身の処し方だつた。

それから一、二度続けてお邪魔し、八七年二月、六年ぶりかでお宅に伺つた。『月刊・非核自治体通信』終刊号のインタビュー記事を作るためだつた。野間宏が最初に呼びかけ、井伏さんも加わつた知識人の反原発声明があつた直後で、そのことに触れると、「効果がなかつたな」とポツリと言つた。「そんなことはありません」と力説したが、納得したようではなかつた。

反核問題でいうと、それから三年後、脱原発を含めた非核東京都宣言を求める百万人署名運動の呼びかけ人になることも承諾してもらつたが、まだその実現を見ていない。中途にして井伏さんに逝かれてしまつたのは何とも悔やまれる。

井伏さんに死なれて悔やまれるのは、もう一つシンガポール時代のことを、さらに立ち入つて尋ねる機会を永久に失つてしまつたことだ。今年（一九九三年）一月、シンガポール公文書館で井伏さんが編集発行人だつた THE SYONAN TIMES (昭南タイムズ) のマイクロフィルムを見ることができ、井伏さんの英文の文章も読むことができたからだ。「一度お伺いして」と思っているうちに、井伏さんの訃報に接してしまつたわけだ。

井伏さんから二、三通、手紙を頂戴した記憶があるが、今日半日あちこち探してみたが、一通しか見つかからない。それは私が井伏さんのソ連の教育ポスターに触れたエッセイを収めた本（近代文学の溝勢力）を贈呈したことへの礼状（七三年六月二四日付け）で、そこには森本敏夫と森本寛丹とは違ふ人物だということも書かれている。調べて書けばよかつたのに、井伏さんの言葉を鵜呑にしたための過ちだつた。

井伏さんの言つた言葉で強く記憶に残つているのは、「文章が書けなくなる時は良心にちよつと向こうに向いてもらふといいね。良心をちよつとなくすといい」。

或る時、夜の講義があつたので、お酒を断つて帰ろうとしたら、井伏さんの皮肉が飛んできた。「西田さんは勉強ばかりしているのよ、大学教授になつてしまつた」。その日は私を相手に飲むつもりで、当てが外れてしまつたのに違いない。

また井伏さんの仕事スタイルで印象に残つているのは、『朝ノ津茶会記』を書いている時だつたと思

うが、その筋書を話すと言って、裏の白い広告ビラを何枚か貼り合せて帯状にしたものを持ち出してきたことだ。そこには細かい字と真つ直ぐとはいえぬ線が万年筆でゴチャゴチャと書き込まれていた。それが井伏さんの創作ノートだった。

もう一つ。或る日、奥さんに案内されて書斎兼客間に入つて行くと、二冊の文庫本をつき合せながら『徒然草』を読んでいた。一冊は年代物で、四隅が大分黄ばんでいた。

晩年の作品には現代物と歴史物とを問わず、戦争を批判したものが多い。例えば、『軻ノ津茶会記』だが、一見すると何ということもない戦国の武将たちの茶会の記録だが、後半は秀吉の朝鮮侵略批判を通じての近代日本の帝国主義への痛烈な批判がはつきりと目指されている。「兼行寺の池」の場合も入口も出口も野嶋見物行だが、中途ではストレートな反戦の訴えが住職の口を借りて叫ばれている。

今日のホトケさんは、八紘一宇といふ国是のもとに散華された英霊である。お上の召集で、はつきり云へば殺されたのである。そこで、この家の爺さん婆さんは、労苦に労苦を重ね、一人の女の子を育てつつ、どんげの苦勞したかは、皆さんがよく知つてる筈だ。……しかしだね、日本の軍隊も大いに人殺しをした。……怒と怒との格闘が戦争である。……全くこれ、お釈迦様の教へに反することで、今日のホトケの菩提ぼだいを祈念すると同時に、絶対、わしら戦争してはいかんことを、今の場で誓ってもらひたい。

どうして井伏さんの作品は晩年になるにしたがつて戦争批判あるいは反戦の訴えを強くして行つたのか。その筋道を明らかにすることが井伏さんが私に残して行つた遺言のようにも思える。